

私の学生時代

薬学部
薬学科

教授 齊藤 浩司



私の学生時代…もう40年以上も昔のこととなり、記憶に残る思い出もまさにセピア色です。まず思い浮かぶのは、親や友達と過ごしたかけがえのない時間、そしてわたしの人生を変えてくれた二人の恩師、有田隆一先生と宮崎勝巳先生のお姿です。

真面目に勉強しなかった私は超低空飛行で北海道大学理類から薬学部に進みました。薬学部を選んだのは、卒業後には薬剤師として郷里の福島県いわき市に戻り、苦勞をかけ続けてきた両親に少しでも孝行したいという気持ちが強かったからです。学部移行時の面談で有田先生にお会いし、「折角薬学部に来ることができたのだから、これまでの自分を反省して頑張りなさい」と諭されました。有田先生のお話に深い感銘を受けた私は、「よし、これからは心を入れ替えて努力し、研究室は絶対に有田先生の薬剤学に行こう」と一念発起したのも

の、相変わらずの怠け癖は解消されず、墜落寸前の状態で何とか進級していきました。

4年次4月の研究室配属で、希望した薬剤学研究室は人気が高く、配属枠を大幅に上回る希望者が集まりました。くじを引く順番はじゃんけんで決めることになりましたが、私は負けに負けて結局順番は最後、すなわち、己の運命を他人に委ねるしかなくなりました。しかし、幸運にも最後の当たりくじは私の上に舞い降りてきました。喜びすぎたせいか(?)、私は配属決定の翌日発熱し休んでしまいました。実は薬剤学研究室では、その4月から有田先生が医学部教授として病院薬剤部に移られたのに伴い、4年生のうち2名がそちらで卒業研究の指導を受けることになりました。翌々日に研究室に顔を出すかと私が病院薬剤部に行くことに決まっていた。予想外の事態に戸惑いながら、その日の午後、病院薬剤部に挨拶に行った私を雷鳴のような大きな声で「良 came」と迎えてくれたのが宮崎先生でした。有田先生、宮崎先生のご指導の下



学部移行の前に親友たちと行った然別湖キャンプ。オシロコマが禁漁であることを知らずに皆で釣り糸を垂れ、監視員に厳重注意されました。前列左が私。

で研究の面白さを知った私は、人が変わったように卒業研究にのめり込みました。私はそこで覚醒した(?)と今でも思います。

卒業近くになり、薬剤師国家試験に合格することを絶対条件として、卒業後北海道大学病院でもう少し勉強させていただくことになりました。私は国家試験合格を自分の可能性への再挑戦と位置付け、これまでの遅れを一気に取り戻すべく文字通り不眠不休で国家試験の勉強に取り組みました。ここまでやれるかと自分で自分に驚くくらいでした。結果は一発合格となり、以後の人生に繋がっていきました。

両先生はすでにこの世を去られましたが、お二人から頂いた無言の教え「その人を育てようと思ったら、その人を信じ、見守ること」。これは北海道医療大学での教員となった以後も自分の大きな支えになっています。

私の学生時代

今、本学の教壇に立たれている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は齊藤 浩司教授と真島 理恵講師のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

私の学生時代

心理科学部
臨床心理学科

講師 真島 理恵



1998年に北海道大学文学部に入学しました。入学時点では、卒業後の進路として研究職はおろか、大学院進学は全く考えておらず、公務員志望でした。当時は必修科目が少なく、かなり自由に履修科目を選択できたので、心理学以外にも、社会学や文学、民俗学など、色々な個性的な授



学部の卒業式に、恩師と撮影した写真。左が私。

業を選んで受けられるのが楽しく、新鮮でした。授業のない時間に友達と学内でパフェを食べたりして、「大学生になったんだなあ」と実感して嬉しくなったりしていたのも覚えています。

2年生からは、社会心理学の講座に所属しました。このときは「なんとなく面白そう」という程度の興味から選んだだけだったのですが、その後、ゼミでの議論に参加し、教員や大学院生とともに研究を進める中で、「新たなものの見方に気づき、目から鱗が落ちる」という経験や、議論の中でアイデアを発見する「知的な興奮」というものを初めて経験し、研究の面白さにはまっていきました。

3年生の中旬くらいからは、授業や部活のないときは研究室に向かい、実験準備や分析などを行う毎日になりました。卒論研究に取り組みはじめて以降は、ほぼ毎日研究



はじめて英語で口頭発表してるところ。とても緊張しています。

室で過ごすのが日常になり、もう少し研究をしてみたい、という思いから大学院進学を決めました。大学院生時代も朝から晩まで研究室にいる生活スタイルで、実験や論文提出前には研究室に泊まりこんでいました(修士論文執筆の時期は泊まりが多くなり、夜中の眠気覚ましに院生同士でやっていた卓上ホッケーゲームがかなり上達しました)。全体として、良くも悪くも研究漬けの学生時代だったと思います。今思えば、苦勞もありつつも、学生時代は好きなことにのめりこめる贅沢な時期だったように感じます。現在学生の皆さんにも、「せっかくの学生時代、のめりこめる何かを見つけて楽しんでほしいな」と思っています。